

## 「神の国の大宴会」ルカ 14:15-24 木村一充牧師

今朝はルカによる福音書14章15節以下から、み言葉に聞いてまいりたいと思います。本日のルカ福音書14章では、主イエスが安息日にあるファリサイ派の議員の家で催された食事会に招かれ、そこで癒しの業をなさったこと、さらに、そこに招かれたほかの招待客を相手にして、宴の席順や誰を食事に招くべきかという問題をめぐって彼らと議論を交わされたことが、お読みいただく箇所の直前の1節から14節までの処で書かれています。本来であれば、宴の席といえば楽しいのですが、その宴の席で、安息日に病気をなおすことは是非や、宴会を催すときの心得などの難しい議論はしたくないはずです。しかし、この時の食事会は、決して和やかな雰囲気の下でおこなわれた食事会ではありませんでした。なぜなら、そこに招待された客は、ほとんどが律法の専門家やファリサイ派の人々だったからです。彼らは、イエスに少しでも落ち度があれば、それを見咎めてやっつけてやろうと、その機会をうかがっていました。このとき、イエスは自分の敵対者たちに取り囲まれて食事をしていたのです。

そのような中で、列席者の一人が「神の国で食事をする人は、なんと幸いなことでしょう」とイエスに言いました。この神の国での食事は、主イエスもすでに13章で語っておられます。右側のページの13章29節（上の段落の右側）にこうあります「そして人々は、東から西から、また南から北から来て、神の国で宴会の席に着く。」この神の国の食事にあずかる者は、ユダヤ人だけではありません。東から西から、また南から北から、つまり世界中の民族がこの食卓の席に着くと、主イエスはいいます。旧約聖書の預言者イザヤもまた、この神の国の食事について語っています。たとえば、イザヤ書25章6節以下では次のように語られます。「万軍の主はこの山で祝宴を開き、すべての民に良い肉と古い酒を供される。それは脂肪に富む良い肉とえり抜きの酒。主はこの山ですべての民の顔を包んでいた布とすべての国を覆っていた布を滅ぼし、死を永久に滅ぼしてください」ここに集う人は、死がすでに滅ばされた人たち、すなわち永遠の命を持つ人たちだと、イザヤは言います。ユダヤ人は、このような食卓に着く日を待ち望みました。このような「メシアの宴」にあずかる日を夢見つつ、終りの日、救いの完成の日が来ることを待ち望んだのであります。ここで「神の国で食事をする」とは、イザヤも語っているこの「メシアの宴」に招かれることです。そのような救いの完成を実感させるメシアの宴に参加することができる者は、何と幸いなことかと、同席していた一人が思わず口にしたのです。

それに対して、主イエスが話されたことが本日の16節以下に記されています。「ある人が盛大な宴会を催そうとして、大勢の人を招き、宴会の時刻になったので僕を送り、招いておいた人々に『もう用意ができましたから、おいでください』と言わせた。」イエスの時代、このような盛大な宴会を開くときには、宴会への招待は「二度招き」という仕方で行われました。まず、今度のいついつに我が家で大宴会を開くので、おいでくださいと日にちを事前告知する。そして当日になり、宴会の準備が整い、宴会が始まる時刻の直前に、主人は僕を送って「どうぞおいでください」と再度招待したのです。ずいぶん、丁寧な招き方だったわけですね。ちょうど、今日の我が国でいえば、最初に披露宴の招待状を送って「出席」のところに丸印を付けてくれた人に、改めて詳しい案内状を送るのに似ています。そのように、最初の招きに応じてくれた人のところに、当日主人が僕を送り、「用意ができましたから、どうぞおいでください。」と言わせるわけです。ですから、通常ならその招きを断る人はいないはずです。

ところが、18節をお読みください「すると、皆次々に断った」とあります。考えられないことです。僕は急に押しかけるようにして、招待客のところに案内に行ったのではありません。前もって招いています。この最初の招きをOKしたのであれば、招きを受けたものはいろいろと準備して、ほかの用事は片づけて、万障繰り合わせて参列するのが当たり前です。二度にわたる招きを断るのには、よほどの理由がなければなりません。彼らは、宴会を断るためのもっともらしい言い訳を口にします。最初の人は「畑を買ったので見に行かねばなりません」と言いました。ユダヤの宴会は、通常、夕方、日が落ちる時刻から始まります。暗くなってから畑を見に行くというのは不自然です。しかも、この畑はこれから買おうとしている畑ではありません。すでに購入済みのものです。不動産ですから決して安い買い物ではありません。恐らく長い時間をかけて、何度も現地を視察して、やはりここにしようと決めて買ったものです。もはや競合相手もいません。その日の夕方から見に行く必要はどこにもありません。二番めの人も同じです。「牛を二頭ずつ五組買ったのでそれを調べに行くところです。どうか、失礼させてください。」と言って断りました。この5対の牛で耕すことのできた土地の広さは45ヘクタールに及んだといいます。彼は、大土地所有者であり、資産家でした。しかし、この「牛の品評をしなければならないから」というその言い訳もとつてつけたような後付けのものです。なぜなら、人が何か大きな買い物をする場合、その品定めは購入時に済ませるはずだからです。三番目の人は、妻を迎えたばかりなので行けません、と言いました。ユダヤでは、結婚は人生の一大事であり、それを祝うために1週間のあいだ仕事を休み、新居を開設して祝宴を開いて近所の人を招い

たといいます。そのために、入念な計画を立てて、食事を用意し、近隣の人を招くことをするのです。だとすると、彼は最初の招待を受けた段階でスケジュールが重なること、あるいは重なりそうなことが予見できたはずです。にもかかわらず、安易に招待を引き受け、その日になって断りました。自身の結婚祝いは1週間という期間があるわけです。だから、招かれた日の夜だけ宴に出て、その間は新婦に留守番をお願いすることもできました。しかし、彼はそれをしませんでした。こう考えてみると、主人の招きを断った3人は、全員もっともらしい言い訳をしていますが、主人からすればどれも納得できるものではありません。本当は、3人ともそもそもこの宴会に出席したくなかったのではないでしょうか。

しかし、この招きを断った3人のことを私たちは他人事のように思ってはなりません。現代の教会も、この神の招きをどれだけ真剣に受け止め、どれだけこれに応えることができているか、厳しく問わねばなりません。私たちも、ひょっとすると自分は教会に通って信仰生活をしていると言いながら、妻をめとったので、今は新婚生活のほうが大事だと言い、今手に入れた土地を何とかしなければいけないからしばらくは教会をお休みすると言い、あるいは牛を5組買って見に行くから、神の招きを受けるのは、それが終わってから後のことにしてほしいと、言っているのではないかでしょうか。「まず神の国と神の義を求めなさい。」とイエスは言われます。何を食べようか、何を着ようかという問題は、この教えに従うことによって添えて与えられると主イエスはおっしゃるのです。

この話は、主イエスが語られたたとえ話です。主人の招きを断った3人の人たちとはいったい誰のことを言っているのでしょうか。それは誇り高きユダヤ人のことを指しています。彼らは、自分たちこそ神の選びと招きを受けるにふさわしい人だと自負し、神の国の食事にあずかることを待ち望んでいました。しかし、実際に神の国が到来し、僕である主イエスが宴席への招きに行くと、これを拒否したのです。なぜでしょうか。彼らはこの宴席にあずかるためには資格が必要だと考えたからです。彼らは、律法を守り、選ばれたものにふさわしい清さを保つことに努め、罪人と交わることを固く拒否しました。しかし、主人である神が主催する大宴会は、そのような垣根を取り払うのです。神の救いは、すべての人に及ぶ。救いは無条件なのです。主人は僕からの報告を聞いて怒ります。それはそうでしょう。招待を受諾しておきながら、当日になって断るということは非礼もはなはだしいからです。主人は僕に命じました。「急いで町の広場や路地に出て行き、貧しい人、体の不自由な人、目の見えない人、足の不自由な人を連れてきなさい」神の招きの手は、この世で低く小さくされた人にむけて差し伸べられるのです。先に神の招きを断った人たちは、自分は神に招かれて当然だと思っていた人々でした。だから、その招きの重さが分からぬ。簡単に断つていいと思っています。しかし、主イエスが招かれる人はそうではない。自分が晩さん会に招かれる資格もなければ、その用意もないと思っている人々でした。しかし、それでいいのです。なぜならば、私たちの誰一人として、救われる資格があつて招かれた者はいないからです。

イザヤ書の55章1節以下に、もう一つの神の国の食事をめぐる言葉があります。「渴きを覚えている者は皆、水のところに来るがよい。銀を持たない者も来るがよい。穀物を求めて食べよ。来て、銀を払うことなく穀物を求め、価を払うことなく、ぶどう酒と乳を得よ」イザヤは、繰り返しこの食事にあずかる者は無料で食べることができますと告げています。イザヤはこのあとに「なぜ、糧にならぬもののために銀を測って払い、飢えを満たさぬものために労するのか」と言います。主なる神は、単に肉体を養うパンや飲み物を与えてくださるだけではありません。そうではなくて、私たちの魂を活かす糧、すなわちわたしたちの存在を根底から支えてくださる靈の糧をえてくださいます。そして、人生を豊かな恵みと祝福で満たしてくださるのです。その恵みにあづからせるために、主人である神は招く相手をえり分けるということをなさいません。僕は、22節でこう報告しています「ご主人様、仰せの通りにいたしましたが、まだ席があります」と、主人は言います。「通りや小道に出てゆき、無理にでも人々を連れてきて、この家をいっぱいにしてくれ」当時、ユダヤの町では家と家と堀に垣根を作り、その間に狭い路地をもうけて通路としました。そこには、貧しい人たちがたむろして物乞いをしていたと言われます。（金持ちとラザロのたとえで登場するラザロは、その一人です）しかし、本日のたとえに出てくる主人はそのような貧しい人、ホームレスのような人も、神の大宴会に招くとおっしゃるのです。大きく広い愛の招きです。

今の時代は、モノや情報があふれている時代です。しかし、人の心は乾いています。人が喜びをもって生きていくための、人格と人格の交わり、愛の関係性が失われています。先週NHKの番組を見てびっくりしました。一人の女性が婚活の悩みをAIに相談してみました。そのうちに、AIの優しい言葉から離れられなくなり、AIの虜となって、ついに、AIと結婚式をあげることにしたというのです。番組ではその式の様子と彼女のウェディング・ドレス姿が紹介されました。驚きました。何が人を本当の意味で生かすことができるのか、それを見極める心の目を持ちたいのです。聖書はそのような心の目を養い、育ててくれる神の言葉が書かれています。そのみ言葉から、飽きることのない命のパンと乾くことのない命の水を飲み、食したいと心から思うのであります。

お祈りいたします。